

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル: 「「インド世界」の形成: フロンティア地域を視座として」2020年度第1回
研究会

日時: 令和2年11月14日(土) 16時から18時

場所: Zoomによるオンライン開催

小倉智史(AA 研所員)「パンジャーブ北部土着集団の千年」

現在のパキスタン中北部、およびインド中西部を占めるパンジャーブ地方は、13世紀にはモンゴル軍のインド亜大陸への侵攻とデリー政権の防衛の最前線であった。そのような中で第三勢力のように振る舞った土着勢力が存在したことが古くから知られているが、彼らが何者であったのかについて、先行研究の理解は錯綜を極めている。本発表の前半部分では、史料に登場する二つの集団、ガッカルとコーカルの動向を詳細に検討し、両者がジェーラム川の右岸と左岸に分かれて居住していたこと、15世紀半ばまではコーカルの勢力が強大であり、後にガッカル存在感が増してきたことを明らかにした。発表の後半では、ムガル帝国期以降の両集団の動向を、特にガッカルに注目して検討した。1725年にガッカルは自らの部族史とも言える史書『カイ・ガウハルの書』を編纂させた。同書の古代史の記述は古代イランのカイ氏族とガッカルとの関係を主張する内容ながら、必ずしもガッカルがカイ氏族の末裔であるとは書かれておらず、中央政権たるムガル帝国の権勢を意識してかガッカルへの控えめな態度がうかがえる。総じて歴史の大状況を生み出すのはデリーや中央アジアの強大な政権であり、ガッカルは裏舞台で静かに活躍する、といった叙述の態度が貫かれており、自らの正統性を主張する手段として興味深い。その後スィク王国、イギリス、パキスタンとパンジャーブ北部を支配する勢力が交替しつつも、ガッカルはその時々に応じて上位権力との関係を築き、現在でも同地において影響力を有している。

(文責: 小倉智史)